

世の中をいとハ、やとおもへとも人くくと、むるに更にふり
すてかたくてとふりうす さて花のころ此山に花見んと云て
人より後ハいてすさて人の待こ、ろなり」(四十・オ)

163 なかむとて花にもいたくなれぬれハちる別こそかなしかりけれ

大かた恋の哥也 花にものもの字大切の心也 花の別さへか
なしきに人になれてハとの心なり

164 哀いかに草葉の露のこぼらん秋風たちぬ宮城野、ハラ

此哥ハ宮きの、心をよみ給ふ也 平兼盛ミヤキ野にてはてた
る所をよむ也 萩もさこそ露おとすらむのこ、ろなり

165 月見ハと契をきてし古郷の人もやこよひ袖ぬらすらん

いつくにてても月見るときハおもひ出んとの」(四十・ウ) 契
なれハさこそ古郷の人のおもふらむとの心 このこ、ろを後
京極殿もあそハしたり

166 きりくす夜さむに秋のなるま、によハるか声の遠さかり行

よさむになれハきりくすハちかく来るなり又其後こそハよ
はるほとに遠さかり行也 とをさかるハよハるほとなり

167 津の国の難波の春ハ夢なれや芦のかれ葉に風わたるなり

春見しあしの若葉の面かけハた、夢也となむ」(四十一・オ)

168 年たけて又こゆへしとおもひきや命なりけりさ夜の中山

西行二度東修行の時の哥なり こゆへしとはおもはぬにこゆ
る事ハた、命なりけりとなむ

169 風になひく富士の煙の空に消て行末もしらぬ我思ひ哉

ふしの山より我おもひたかきとなり

170 山里にうき世いとはむ友もかなくやくすきし昔かたらむ

いまはうれしきによりよき事をハ他にあたへたきのこ、ろな
り

(謠山麓舎)」(四十一・ウ)

(下松)

」(四十二・オ)

〔論文受理 54・9・29〕

151 ゆふ月よ塩みちくらし難波江の芦の若葉をこゆる白浪

夕月の比ハ更あしのわか葉にしろく影のするハ塩のことくと
の心也 月もあしもなにはなれハなり 此人を定家ハにくま
れし也 後鳥羽院御ほうひの人なり」(三十七・ウ)

152 山里の風すさましきゆふ暮ニ木葉ミたれて物ぞかなしき

山里ハ更たゝの比さへ木葉おち散る比ハ更やるかたなくかな
しきにの心なり一ふしの哥

153 月すめハ四方のうき雲空にきえて太山かくれを行嵐かな

此哥ハ空に月あきらかなる比ハ雲も嵐も太山かくれをわたる
との心也 空にハきえて深山かくれハ残て雨風に類して行心
なり

154 草枕ゆふへの空を人とハゝなきてもつけよ初かりの声

此哥ハ旅の心をおもひしめてよむ也 草枕人とハゝ(三十八
・オ)たゝなくハかりとつけよとの心也 これハそふる心あり
よく心をしつめて見るへし

155 した紅葉うつろひゆけハ玉ほこのミちの山風さむく吹らし

一ふしの哥なり 玉ほこのと云ところに心あり玉鉾ハ神代よ
りの道のはしめなれハはやうへりくたる心なり 山風を比に
をくなり

156 藻しほ焼あまの磯屋のゆふ煙たつ名もくるし思ひたえなて

ゆふへの恋と云心を いそやのゆふけふりハもしほ(三十八

・ウ)やくによりて立なり 思ひのたらぬによりて名ハたつな
り

157 袖のうへに誰ゆへ月ハやとるそこそになしても人のとへかし

月をかことにも人のとひこよかしとの心もえたちて恋しきこ
ころなり

158 いまこむと契し事をわすれすハ此ゆふ暮の月やまつらん

此ゆふ暮にこむといひし事を忘すハはやおもひたつらんと
の心也 一ふしの哥也

159 露をたにいまはかた見の藤衣あたにも袖をふくあらしかな

是ハあひしやうのこゝろなり 藤衣ハいミの」(三十九・オ)

時の衣なれハ人の形見に袖の露をも風吹などの心なり

160 あしひきの山路の苔の露の上にね覚夜ふかく月をみるかな

旅のうたなり この山路にて月かんせひありあり 足引山の
(の感情) (ママ) (ハ)

惣名なり旅の本意也 此前の二首めにいるゝなり
西行法師

161 吉野山桜か枝に雪ちりて花をそけなる年にもあるかな

此雪ハ桜の花也 ちる比ハ更雪のことくなれハ(三十九・ウ)
萬人雪とミて花をうきともミへし桜と雪とのかむよく思
へし 花をまつ心なり

現存ならぬ人ハ是ハかり 西行ハ後鳥羽院御ほうひの人 不

可説の上手也とあり おほろけの人まなふへき哥にあらず

162 よし野山ゆかて出しと思ふ身を花ちりなハと人やまつらん

寂蓮法師 俊成養子

141 いまはとてたのむの雁もうち佗ぬおほろ月よの明ほの、空

此哥ハ雁かねも此月のおほろの時分かへる心ハ」(三十五・オ) さそとの心をこなたよりつけてよむ也 此哥心をふかく
してみるへきなり

廣学の人なり 後鳥羽院御ほうひの人なり 俄の事までもゆ
へある様によみし人也 此哥のミなもと心肝にそミておもふ
へし

142 かつらきや高まの桜さきにけり立田のおくにかゝる白雲

此哥たかまの桜のさく比かたつたの山のかすむれとの心なり
後鳥羽院御ほうひの哥なり

143 物思ふ袖より露やならひけん秋風ふけハたえぬ物とハ」(三十五

・ウ)

此哥袖より露ハならひけんハ人にあかれたれハ涙もきゆると
の心也 秋風の心肝要なり

144 村雨の露もまたひぬ真木のはに霧立のほる秋のゆふ暮

此哥ハ見る躰ハかりなりさせるふしなし た、一節の哥ゆう
けんなり

145 老のなみこえける身こそあはれなれことしもいまはすゑのまつ山

あはれふかき心なり老の心のやるかたもなく年のくるゝとの
こゝろなり

146 思ひあれハ袖に蛩をつゝミてもいはゝや物をとふ人もなし」(三

十六・オ)

此哥ハ袖に蛩をつかハすにやよりて返哥あり つゝめどもの
哥也内親王ハ俊成の儀あつよしの親王ハ定家の儀歟 大和物
語の心取名別 下の句へつゝけて心得へし 物思ふ袖よりの
哥の心躰ハおほろ月の躰なり 忍恋の題

147 うらみ佗またしいまはの身なれともおもひなれにし夕暮の空

待なれたる心ほとうきものハなしとの心なり やゝもすれハ
またれける也 ゆふ暮にさても待事やものおもはぬ人もゆふ
暮ハかなしきとなり」(三十六・ウ)

148 里ハあれぬむなしき床のあたりまで身ハならハしの秋風そふく

逢不逢恋なり さておもふ人もこす又さともうち荒て秋かせ
吹きあれてかなしきとの心也 人もこす里もあれたるハあは
ぬ心也 秋風ハあふ心なり

149 さひしさハその色としもなかりけり槇立山の秋のゆふ暮

真木立山の色ハその色としもなければとも月紅葉のかたにハ秋
ハ人こそくるゝまきたつ山ハあはれにさひしとの心也 其色
としもに心をかけよ

150 月の行山に心をくりいれてやミなるあとの身をいかゝせむ」(三

十七・オ)

月のいるの哥仏法に一説あり月入かたに心を斗をくりて更身
のうちの月を見る事なしとの心なり さるほとにやミなると
ハいふなり

129 草枕むすひさためむかたしらすならハぬ野への夢のかよひち

此哥ハ旅の心也 我たにいま枕をもさためぬに夢の見えぬ
もことはりと心なり」(三十二・ウ)

130 君が代にあへる斗の道ハあれと身をハたのます行末の空

きみか世につかはる、ハかりにて後世の事をハ少も思ひそめ
ぬとの心也 さりなからもおもふハかり也

源具親朝臣

131 難波かたかすまぬ浪も霞けりうつるも曇るおほろ月よに

さやかなる秋にもまさるなかめ哉月影かすむ明ほの、そら

おほろ月よの事なれハかすまぬ浪までもかすむとなり

132 ときしもあれたのむの雁の別さへ花ちる比の御吉野、里」(三十

三・オ)

雁かねも花の比の別ハおしむとの心也 さても此もの字肝要

なり

133 敷たへの枕の上に過ぬ也露をたつぬる秋の初風

露を尋る秋の風ハしきたへの上を所と過る也

134 月の秋ハ名にのミよるのもしほ草かくかきたえてミる夢もなし

此哥明月なれハ更夜るもなき心をよむなり 月明なる心なり

かくかきたえて見る夢もかなとの心もしほ草ハかくかきたえ
てのまくら詞なり かならすあはむといひしをまつとせし」

(三十三・ウ) ほとに春夏秋過て時雨のふる恨也と云心 本

哥伊勢物語のうちなり

135 いまハ又ちらてもまかふ時雨哉ひとりふり行庭の松かせ

木葉のちる比ハ涙もまかひけるに今ハはや更ニまかふへきも
のなき 独ふり行ハ松風の心也

136 なれくもる影を都にききたて、時雨とつくる山のはの月

山のはの月の時雨にくもるハ先都のくもるとの心なり 山の
時雨ニ月影少くもりたる心也其をつくると云也

137 又もかく浮世にわふるためしあれハた、よふ雲の跡の村雨

我ハかりうき世に佗と思ひしに我たくひも有ける也」(三十
四・オ) た、よふ雲の跡のむら雨をたくひニする也 世の中
をなに、たとへんの哥同躰也

138 なかめよとおもはてしもや帰るらん月待うらの海士のつり舟

此哥月の時分ニつり舟のかへるハ更見事と云心也 海士人の
心にハ人に見せむとの心ハよもあらしさりながらも面白しと
なり

139 遠さかる雲るの雁の別さへかすめハつらき難波江の月

この難波のうらをかへる雁さへかすむとの心なり 此浦の春
の明ほのハさらにこと葉をかされぬ様なり」(三十四・ウ)

140 木枯やいかに待見ん三輪の山つれなき杉の雪おれの声

此哥二説あり 木からしにたひして木枯にハつれなくて雪に
はおれもなひきもすれハいかにして此杉をまち見んの心なり
又一にハ杉にたひして木枯よとハかためたる也 雪にハなひ
きて木からしにはいかにと云心也 恋の哥也

君まさハとハまし物を津の国の生田のもりの秋の初かせ 此
哥ならすきのふたにの本哥あり

116 おもひ出よ誰かねことのすゑならむ昨日の雲の跡の山風

此哥ハ鬼とりひしく躰」(三十・オ)

117 明ハ又こゆへき山の峯なれや空行月のすゑの白雲

山家にかりねして嶺行月をミてうらやましきかなやの心なり

明日ハ我もこゆへき峯を先雲のこゆるとなり

118 その山とちきらぬ月も秋風もすゝむる袖の露こほれつゝ

月も秋風もあらましをさそふ様なる心なり しかといくつの

山とおもはねとゝなり

119 なかめつゝおもふもさひし久かたの月の都のあけかたの空

月の宮こにて天人舞をまふ事也 夜深るにしたかひてまひ人

すくなくならるゝなり」(三十・ウ)

120 和歌のうらや奥津塩あひにうかひいつる哀我身のよるへしらせよ

雅経

121 白雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風そふく

哥いたく案せられし人也 しら雲の哥本哥あり 春の柳ハ似

せ物なり山の碧成躰なり 俊成卿の弟子也 哥ハ少似たれと

も俊成の様にたくさんにはなし たり也たけある云ハなし

122 尋きて花にくらせる木間よりまつとしもなき山のはの月

自然におもしろき躰なり」(三十一・オ)

123 たへてやハおもひありともいかにせむ葎の宿の秋のゆふ暮

やはとハなき心もあるましき心をやハと世そくに申なり 思
ひあるハ本哥也 惣してよしある心なり

124 はらひかねさこそハ露のしけからめやとるか月の袖のせはきニ

涙ハあほく袖ハせはき心也 かくのこゝく涙ハはらへともは

らひかぬるまでおほき袖にも月ハ等閑なくやとる心なり こ

れハふかき心ハなきなりたゝうれへのせちなき躰なり 此躰

俊成卿の吾におほし

125 うつり行雲に嵐の声すなりちるかまさきのかつらきの山」(三十

一・ウ)

たけたかき躰也 此ハうつり行雲のはやき心もあり又秋の山

の木葉などのちるを云なり 雲に声のあるハまさきはしちる

かとの心なり

126 秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木枯の風

此哥ハ月のかつらに木枯の吹かとの心なり 此やの字肝要な

り 萬草木をハ染すてゝ又月のかつらニ吹かとのこゝろなり

127 いたつらに立やあさまのゆふ煙里問かぬるをちこちの山

この哥大事の哥也 信濃なるあさまのたけに煙の」(三十二

・オ) 立を見て目のまへに地獄をゝきても人のつれなく宿を

くれすとの心也 さていたつらにとハよむ也

128 なれくゝてミシハ名残の春そともなと白川の花の下かけ

これハ都にて白川をおもひやる哥也 春にも花にもなるれと

もなと白川をハしるへきといへり

待ならひたるとて此嵐にもまつとのこゝろなり　せむかたな

きなり

107 玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふるやとの秋風

多心なり　しハしの心得なり　風のすゝ敷かハるにも哥の心
也　俊成卿より定家方へ此哥をハ送られし」(二十七・ウ)

返哥なり　定家の母二月うせて俊成の哥の返哥也　涙の露の
(以下ママ)しにとハしのにハ両説あり　いつれも可用也

108 消わひぬうつろふ人の秋の色に身を木枯もりの白露(下)

三躰の内涙のひぬ躰なとよみたくおもふ共又二度よまれまし
き哥なりとあり恋わひたるちからののこりたるハ木からしの
吹のこりたる森のしたにある露の様なる心なり　たとへなり
此哥心句ことに勝たる哥何とよみたく共二度よまれましきこ
との葉もなき事なり

109 いつくにか今夜ハ宿をかり衣。ゆふ暮の峯のあらしに」(二十八
日も

・オ)

此哥まつ旅の心なり　大方ハ母の心もそこにあるなり　故ハ
旅心ハ此世も又後の世もかなしきニはや日も暮ハさこそうか
るらむとの心なり

110 袖にふけさそな旅ねの夢も見し思ふかたよりかよふうら風

此哥旅ねの夢なども更ミぬ事なれハ定而こなたをのミ思ひを
こすらむその枕をふきたる風なをこすほとにふけとの心也
これ両方いせひなり

家隆朝臣

111 桜花夢かうつゝ、か白雲のたへてつれなき峯のはる風」(二十八・ウ)

さくらのあたなるといふ事よミつくしたれハ如此よめるなり
本哥古今の哥　此十首みな天下の人褒美の哥なり
彼家隆若年にてハ下手四十八かりより堪能になる　此卿の哥
ハ心よりも風情上手也　建仁の比よりも銘哥出来　始ハ俊成
の弟子後ハ俊頼の弟子もと中あしきによてなり　始ハ俊成の
むこ後ハ離別寂蓮の妻になる　雅経と兄弟の流也　非をよく
知人なり」(二十九・オ)

112 いかにせむこぬよあまたの郭公またしとおもへハ村雨の空(すれ)

時鳥を待かねてはやまつましきにおもひぬれとも又むら雨ふ
るほとにおもひすてすと云　本哥にたのめつゝこぬよあまた
に成ぬれハまたしと思ふそまつにまされる

113 した紅葉かつちる山のゆふ時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん(しかのひとり)

此哥ハさをしかのこゑほのかに聞えくる所ニ何となくあはれ
におもひ初て夕の雨に鹿をきゝて哀とおもふなり」(二十九

・ウ)

114 思ひいつる身ハ深草の秋の露たのめしすゑや木枯のかせ

我おもふ人ハたゝかれゝの心をよむ　たのめしすゑや木か
らしの風いまの事なり

115 昨日たにとハむと思ひし津の国の生田の森に秋ハ来ニけり

秋とたに吹あへぬ風に色かハるいく田の森の露の下草　定家

大よとのけひきなり 本哥の心底にあり 鶯のこほれる涙の
たくひなり 又恋の哥なり」(二十四・ウ)

94 花をのミおしミなれたる御吉野、木すゑ□おつる在明の月

此哥ハ花をおしみなれたる御よし野、とハ身の事をいはむた
めなり 此こと葉にて春の名残も又月のなこりもあり

95 行年ををしまの海士のぬれ衣かさねて袖に浪やかくらん

おしむなり 大よとの類 老すひの心 老の浪の心もあり

96 物おもはてた、大かたの露にたにぬるれハぬる、秋の袂を

この哥いひのこしたる哥なり」(二十五・オ)

97 旅衣かへす夢路ハむなしくて月をそミつる在明の空

かへすとも雲の衣ハうらもあらし一夜やかせ峯の松かせ

花をのミとおなし躰なり

98 岩かねの床に嵐をかたしきて日とりやねなむさ夜の中山

是等よき躰 嵐をかたしくと云も岩ねの床の事なり

99 我なから思ふか物をとばかりに袖にしくる、庭の松風

山の井のたくひ古郷などの躰

100 春雨のあまねき御代を憑かな霜にかれ行草葉もらすな」(二十五・ウ)

此等よき躰 述懷卑下の哥 我身を卑下せらる、哥なり 草

葉のことくとなり

定家朝臣

101 春のよの夢のうき橋とたへして峯にわかる、よこ雲のそら

春のよハ夢かちなれハ也 霞はう／＼として夢おほく見ゆる

なり 何事も／＼只春の夢のことくとの心也 ことにひかる
けんし夢のうき橋の儀もあり 此人の哥ハをけたるかたなし
春ハ夢かちなるほとに春のよの夢とよむなり 四十八まで俊
成に」(二十六・オ)よこ雲まではいかむのよし難あり 春
のよの夢しけく短夜なからむすひ久／＼あるなり

102 駒とめて袖うちらはらふかけもなしさの、わたりの雪の夕暮

俄にもふりくる雨か三輪か崎さの、わたりニ家ハあらなくに

万葉此哥にてよむなり ほの／＼の別の哥と同類なり

103 年もへぬ祈る契ハはつせ山尾上のかねのよそのゆふ暮

定家卿ある人に心をかけて年をへて初瀬へまいられけれども

そのしるしなくしてきハまる心に契ハ」(二十六・ウ)はつせと

つ、くる也 其女房のかたへ行たる時きてよまれたる歌なり

われハとしをへて尾上の鐘ハよ所のちきりとなる心なり

104 松かねを磯辺の浪のうつたへにあらはれぬへき袖のうへかな

此哥ハ磯辺の松のねを浪のうちよすれハ土うすく成て根あら

ハる、ことく我涙もあらハれなんと心なり

105 帰るさのものとや人のなかむらんまつ夜なからの有明の月

此上句一年中案せられたるにや 本哥古今有明のつれなく見

えしの哥なれハせて恋しき」(二十七・オ)人の家をも見て

かへれハあり これハ待夜なからにてもなくあかしたる躰

106 あちきなくつらき嵐のこゑもうしなとゆふ暮に待ならひけん

この哥更夜をかさねてまでともくる事もなししかハあれとも

二・オ）難と同心也 比良の山かせハあらし風にハ秋情なき也

83 かたえさすおほふのうらなし初秋に成りもならずも風そ身にしむ

宮内卿おもひある時分秋の来るをもしらすしてよみたる也
とふりうの心也 初秋になりてもならてもあれいかさま風ハ
身にしむとなり

84 心あるをしまの海士の袂哉月やとれとハぬれぬ物から

この哥八月をまつ時に浦のあま人舟をさしてかへり又袖ぬれ
たれ八月やとるを見てハ更にこと葉もをよはぬさまなり」

(二十二・ウ)

85 月を猶待らん物かむら雨のはれ行雲のす糸の里人

はれハ退出せすして待心をいふ 東に雲のこりて月もいてこ
ぬ心なり

86 霜をまつ籬の菊のよひのまにをきまよふ色や山のはの月

此哥ハ更人しらす菊にしもをミて綿などをきする事あれハな
り 山の端の月いまとほき影すこし菊にうつれるをハ霜か
とのこゝろなり

87 立田川嵐や峯によはるらむわたらぬ水も錦たえけり」(二十三・

オ)

この哥ハうちむきたるなり 峯に風よはくなれハ紅葉もうす
きとのこゝろなり わたらぬ水とハ二の心あり わたるなり
又わたらぬ水にもなしとの心なり

『自讃歌』について

88 聞やいかにうはの空なる風たにも松に音するならひありとハ

寄風恋の哥なり 空吹風たにも松に音するならひありまして
我まつ人のをとつれもなきハとの心なり うはの空なるとハ
よふこゝろなり

89 から錦秋のかたみや立田山ちりあへぬえたに嵐吹也」(二十三・

ウ)

残事なき心なり 断絶のこゝろ云説もたえたる心なり

90 まとろまで詠めよとのすきミ哉あさのき衣月ニうつ声

いつれのひとか我衣うつをきゝてまとろまで月見よとハうた
ねとも 折節の心をよむ也 比の哥なり

有家卿

91 朝日かけにほへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとそミる

すこしのこるをいふ 是ハむかしのもちひやう山の字肝要の
眼也 此哥を吟する時ハ違例も平隠するのよし頓阿申さる」
(二十四・オ)

(二十四・オ)

此人定家の弟子也 久我の類源家也 彼人も定家の心には庶

幾せず 此哥 桜花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる

蓬生の宿 定家

92 こぬ秋のいつ暮はてゝうす氷むすふ斗の山の井の水

桜の時分の下水をミれハ更比類もなき間以前冬のうす氷の鏡
ハくもりたるとなり

93 おほよとの月にうらミてかへる浪松ハつらくもあらし吹なり
(よに)

か也 さかの禪尼」(十九・ウ)

72 面影のかすめる月そやとりける春や昔の袖のかたみに(なみた)

水無瀬五十番の哥のうち也 老後の哥也 今の月ハおもかけ
かすめる月にてそやとらん我涙ハむかしの春の涙なり 恋
のなみたにてハなし

73 あたにちる露の枕にふしわひてうつら鳴也床の山風

我うきこゝろをもちてよみたる哥也 床の山にふしたる鶉の
なく事ハ生徳うき心なり 野原にてもなしとの心なり

74 いにしへの秋の空まですみた川月にことゝふ袖のうへ哉(露)」(二十

・オ)

古の事まできらりと見ゆると也 あまりよく此月にいにしへ

かみゆる程に月にこととふと云なり

75 おしむとも涙に月ハ心からなれぬる袖の秋をうらミて

おしむハあきらかなる涙のやとれハなり 心から秋をうらむ
るほとなり

76 色かハる露をハ袖にをきまよひうられて行野への秋哉(かせ)

此哥ハ野へハうらかれたれとも袖にはのこりてたふくとあ
る心なり うらかれハ冬になる躰なり

77 ふりにけり時雨ハ袖に秋かけていひしハかりをまつとせしまに」

(二十・ウ)

かならずあはむといひしを待とせしほとに春夏秋過て時雨の
ふる恨也と云心 本哥伊勢物語のうちなり

78 霜かれハそことも見えぬ草の原誰にとハまし秋の名残を

此哥ハ人の跡とふらひて冬此野にきての哥也 冬かれハそこ
ともしらぬ又何を秋の形見にハすへきとなり

79 したもえに思ひきらなむ煙たに跡なき雲のはてそかなしき
人にもしられすしておもひきえたらむ煙さへ雲と成てあとハ
のこらしとなり」(二十一・オ)

80 夢かとよ見し面影も契しも忘すなからうつ、ならねハ

此八十首中ニ最上の哥也 五文字をハ終に心へぬ也

宮内卿

81 かきくらしなを古郷の雪のうちに跡こそミえね春ハ来にけり

されハ定家卿も同前に申さること也 春の雪にハ似あはぬ五
文字なり はるの心ちもせぬと也 かすみもせずのとけくも
なき事を跡こそ見えねとよめり 真実ハ春のあとなきとはい
か、

ともしせしは山しけ山忍きて秋にハたへ」(二十一・ウ)ぬ

さほしかのこゑ 雅経卿此哥下句をまちて宮内卿に読合せら
れける時上句を宮内卿をかる、なり 俊成卿此文字を心えお
もはれけるかこのとの人の哥にはよみすきたる哥也 されハ
とて苔のしたともいそかれすうき名をうつむためしなけれハ
此哥ハ雅経卿にたはせられて内裏を出ける時よめる哥なり

82 花さそふひらの山風吹にけりこき行舟の跡ミゆるまで

落花生水にこゝらうかひたる心也 此五文字も前の」(二十

れて名をハたつへきかとの心なり

60 今こむと契し事ハ夢なから見しよに似たる有明の月

いまこむと契し事ハはやたえて夢にミゆなから月ハ其夜の月
りと云心 わかれの時ハ夕月いまは在明也 今こんと云しハ
夢の様也 月斗ハもとの」(十七・オ)月なり

釋阿俊成卿

61 むかし思ふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山郭公

蘭省花時錦張本廬山雨夜草庵中と云詩のこゝろもあり 北野
さむさうにて雨のかなしきを思ひて此詩を觀する時おりふし
郭公つけきたるを聞て涙なそへそとよミ給へり 此自讃哥の
時分ハ八十歳撰正家ならてハ入道入ぬを此俊成千載集に入道
といれり」(十七・ウ)三十八にて基俊に古今を相傳となり
62 忘れしよわするなとたにいひてまし雲るの月のめくりあふまて

（心ありせは）

御位ゆつりのちかく成ての哥 種々の事共あり 帝王の御位
ゆつりの時の哥也 御位ヒゆつりニなれハ先帝に仕ふる人ハ
しりそく也 下句ハ卑下の心也

63 しめおきていまはと思ふ秋山のよもきかもとに松虫そなく

このころ年九十よの時の哥なり

64 いかにして袖に光のやとらむ雲るの月ハへたてこし身に

（を）

述懷百首詠て奉るつゝミ紙に此哥あり 此哥も内裏へ歸參之
時の心なり」(十八・オ)

65 風ふく嶺の紅葉の日にそへてもろく成行我涙かな

この哥も述懷の哥の内なり 日にそへて木葉も我涙ももろく
成行との心なりもろく成行ハ老のなみたなり

66 仙人のおる袖にほふ菊の露うちはらふにも千世ハへぬへし
そせひか哥を取てよまれたり

67 難波人芦火たく屋に宿かりてすゝろに袖のしほたるゝ哉

すゝろハしたはやなる心也 袖のしほるゝハむよふかなのこ
ゝろ」(十八・ウ)

68 まれにくる夜半もかなしき松風をたえすや苔の下ニ聞らん

此哥ハ定家卿の母まかりて後此はかへまいりてちかくの堂に
ねて彼のはかの松かせを聞てよむなり まれに聞たにかなし
きニたえす苔のしたに聞らんのこゝろなり

（小篠）

69 ちらすなよしの、葉草のかりにても露かゝるへき袖の上かハ
露おちやすき物かな也 露かくあるへき袖にハあるましきな
り」(十九・オ)

70 たちかへり又もきてミむ松嶋やをしまの宮屋浪にあらすな

（の）

此哥一ふしの哥なり 旅の心也 老して二度ミむ事かたけれ
とも浪にあらす又もこんのこゝろ也

俊成卿女 後ニハこしへのナニ

71 梅の花あかぬ色香も昔にておなしかたみの春のよの月

この一ふしの哥梅に月ハたよりのあれハなり 梅のさく比の
月なれハ同かたみと云心也 今末の春也との心也 俊成卿千
載集を撰せし時のてちたひの人なり こしハハ所の名なりき

はる、とよむ哥也

49 猶てらせ代／＼にかはらす勇山あふく峯よりいつる月影

面には臣を守らむ内にハ摂取不捨の御誓願あり」(十四・ウ)

50 浅茅生や袖に朽にし秋の霜忘れぬ夢をとふ嵐哉

袖にくちにし秋の霜ハ置霜なり

権中納言通具

51 梅の花たか袖ふれし匂そと春や昔の月に問はや

此哥ハ伊勢物かたりの心と言をとる也 さてハ大かたの心ハ

さても梅の花ハ誰といふ人の袖をふれて今までか様の匂ハあ

るそとの心なり 春やのやの字ハ心なし 通光の兄或本ニハ

右衛門督通具とあり 俊成弟子也と見えたり」(十五・オ)

52 袞又いかにしのはむ袖の露野原の風に秋ハ来にけり

此あはれハあつかれの心なり 此五文字ハさても又との心な

り あるほとハありのすきみになしても後ハ日にそへてしの

ひ忍事あるへしとの心なり あたなる秋にさてもこの、ろな

り

53 影やとす露のよすかの秋暮て月そすミける小野、しの原

この哥ハ小野ハ都の辺なれハ月なんともあるましき様に宮_二

の人ハ思ふに露をたよりに月ハやとるそと思しに秋過ても此

里に月残との心なり」(十五・ウ)

54 野へにをく露の名残も忍はれぬあたる秋の忘かたみに

此哥ハいまた露も霜かれぬとの心なり 秋はあたるものなるにとの心也 この露を過る秋のかたみにとの心なり

55 霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影そさやけき

此哥ハ人を待袖に霜をむすひてまでもこぬ夜なれハうちと

けてねぬと云心也 此霜のことくにうちとけてのこと葉なり

霜をむすひたる袖をかたしきたることくにうちとけてねぬよ

の月かくすさましきなり

56 冬のよのね覚ならひし慎の屋の時雨のうへに霰ふるなり」(十六

・オ)

此哥ハ畢竟ねぬをわひたる哥なり 真木の屋に時雨霰ふりつ、

きてハいねぬへき事かたしすさましきとの心也 又の心ハ旅

人の心 されはたひの哥なり

57 霜こほる袖にも影ハのこりけり露よりなれし有明の月

此哥ハ霜こほる袖まで月の影のやとりたるは露よりなれたる

との心 其ことく人を待ハすてかたく忘かたくして待との心

也 下句やさしく面白となり

58 木葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色と見るまで

此哥老後の哥也 涙のもろきハ時雨か木葉かと」(十六・ウ)

うたかふに又時雨にもあらずた、我なみたのもろくなるそと

のこ、ろなり

59 せきかへし猶もる袖の涙かなしのふもよその心ならひに

此哥ハ我ハ更に人の心にてハなきかかやうにうたてくも涙も

37 世の中のはれ行空にふる霜のうき身一そをき所なき

此哥ハ述壞十五首の哥の中なり 心ハ仏法の心なり 世中の
はる、様に我心もはるれともをき所なし 霜ハをき所なり

38 をしなへて日吉の影ハくもらぬに涙あやしき昨日けふ哉

此哥も述懷十五首の中に定家卿つまでん^(マゴ)」(十二・オ)なり

をしなへて日はよしと云心也 さりなから此山のくもるハ若
老か身のなみたくもるかの心なり

39 山里に契し庵や荒ぬらんまたれんとたに思はさりしを

此哥ハ浮世をいとふ人のあらましに先山へ入てみれハ我より
さきに世をいとふ人の所へ行て契て後又古郷へかへりて程を
経てのちの哥也

40 我たのむ七の社のゆふたすきかけても六のミちにかへすな

此哥ハかりそめにも此世へかへし給ふなどの心也 六の道ハ
六道の事也 ゆふたすき木綿たす^(十二・ウ)きなり かけ
てもハかりそめもの心なり

権大納言通光

41 三嶋江や霜もまたひぬ芦のはにつのくむほと春風そふく

此哥ハ春にはや／＼と成たる心 三嶋江ハ人のゐたる所なれ
ハよそよりはやくあしのもゆるとの心なり 又をの子共詠し
て水郷をのそむと云題にての心なり 権ハ位をかけたる儀な
り 此人ハ定家卿心になハす百人一首にも又恋の大躰にも
いらぬ人也^(十三・オ)

42 武蔵野ハ行とも秋のはてそなきいかなる風のすゑに吹らん

此哥ハ旅の行すゑをかなしむ心也

43 明ぬとて野へより山にいる鹿の跡ふきをくる萩の下かせ

眼前にあらず推量のこゝろなり 鹿音聞得たる其あたりの躰
なり

44 明ほのや川瀬の浪の高せ舟くたすか人の袖の秋霧

一向舟も人もなし明ほの、霧のしらく村立たるは袖に似たり^(十三・ウ)

45 さらに又すゑ^{くれ}をたのためと明にけり月はつれなき秋のよの空

此哥ハ更にた、月ハつれなき物と云心なり や、もすれハ又
暮をたのため^と明て人ハこぬとの心なり

46 峯こゆる雲につはさやしほらむ月にほすてふ天津かりかね

此哥ハ是程の月の面白に雁かねの鳴ハ若嶺こゆる雲につはさ
のしほるかの心也 これほと明月にとの心也

47 なかめわひぬそれとハなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空

此哥ハ雲のはたてと云事二目をかくへし 雲のはたてとハ暮
の時日をすミ染の雲のかくすハ更^(十四・オ)はたてとハ
暮の時日をすミ染の雲のかくすハ更に人の死する時の儀とお
なし心なり

48 かきりあれハ忍の山の麓までおち葉かうへの露そ色付

此哥ハ忍と云事ハ大事也 萬のしのふ事ハ人目をしのへとも
一度ハもる、心也 其よりとりよせて忍山の落葉をハやあら

西行世の中をいてし時の心はへなり 旅人と云心若見えすや
あらむの心をふくミたるなり」(九・オ)

27 いはさりきいまこむまての空の雲月日へたて、物おもへとハ

此哥ハ只今こむといひしか月日へたて、もの思へとはいはさ
りきとの心 此空の雲も月日をへたてれハなり

28 めくりあはむかきりハいつとしらねとも月な隔そよその浮雲

本哥ハほとハ雲井の哥なり 恋の哥なり うき雲ハ人なり
若まつ人のこぬハわれをへたつるかの心なり

29 人すまぬ不破の関屋の板ひさし荒にし後ハた、秋の風

本哥よりも狼たかくもぬけたる哥なり た、と云文字大切の
事なり 春夏冬も秋風ハかり也」(九・ウ)

30 春日山都の南しかそおもふ北の藤なみ春にあへとは

此哥ハ母の御為に奈良の南ゑむ堂を立ての供養に詠たる哥な
り 本哥ニふたらくの南の岸にたうたて、いまそさかへん北
の藤なみの本哥を取ての哥なり 明神に淡海子孫繁昌をいの
られしなり 此哥春日の明神の御哥

前大僧正慈円

31 いつまてか涙くもらて月ハミし秋まちえても秋そ恋しき」(十・

オ)

此哥ハ慈円老後の哥なり 秋まちえてもの心ハ老後ハ月くも
りて見えすさていつまてか涙もくもらて月ハ見て月ハあるそ
と云心なり

無動寺の一流とて慈円の流あり 内外ともに智恵たけたる人
なり 臨終の大事を作給ふなり 阿弥陀観也 哥道ハ諸道を

しる諸道ハ一道をしる 後鳥羽院御ほうひの人なり 俊成西
行兩人にたんれむの人也 哥ハ西行弟子語言三昧をえたるよ
ミてなり 神にも通人也」(十・ウ)

32 木葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらて行嵐哉

此哥ハ春日の社頭にて落葉の題にての哥なり 木葉に心を染
袖をかたしきたれとも嵐に木葉をそへ落と云心をよめり

33 露さゆる山田のくろの村薄かる人なしにのこる比かな

此ハ尾花の哥なり さひしき心なり 十首の中 この哥百首
にもぬけたり 不破関にも猶まさり又かる人のありつへしく
もなき様にの心なり」(十一・オ)

34 野への露ハ色もなくてやこほれつる袖より過る萩の上風

此哥ハ我なみたの落をかなしミて野、露にくらへて野への露
ハ色もなくてこほるらむとらやミたる斗なり

35 岡のへの郷のあるしを尋ぬれハ人ハこたへす山おろしの風

此哥ハさうくとしたる躰なり 是ハ作者の透逸の哥なり
定家卿の哥に面影ハをしへし宿にさきたちてこたへぬ風の松
にふく音の哥の心なり」(十一・ウ)

36 思事なと問人のなかるらんあほけハ空に月そさやけき

此哥恋の心なり 先法花中道観の哥なり 無問而自説稱歎所
行道の心なり 此文能々可思惟

(六・ウ)

此哥ふるき躰よく／＼心にそむへし 本哥に足引の山よりい
つる月待と人にはいひて君をこそまで 人丸の哥也 此哥に
て君まつとねやへもいらぬいひかへたるなり 山のはにいて
ていきよふ月待と密勘の六帖にあり

16 夢にてもミゆ覽ものをなけきつ、うちぬるよひの袖のけしきに^(は)

夢にてもいかてみえすハあらむ色々の事ともあれとも。いた^云

ささるなり

17 忘てハうちなける、ゆふへ哉我のミしりて過る月日を

此哥君臣の二の心あり 哥にハ此心あるへし 忍恋なり」

(七・オ)

18 玉のをよたえなハたえねながらへハしのふる事のよはりもやする

此哥臣の心なり 定家に御忍の事暮ことに御約束変たるなり

19 いきてよも明日まで人ハつらからしこのゆふ暮をとハ、とへかし

此哥ハ悉うらミをけふにつくしたる御心也 せつなる心なり

この哥恋の本意の哥なり 口傳在之

20 それなからむかしにもあらぬ秋風にいと、なかめを賤のをたまき

此哥今の秋風むかしにも似ぬとハ山にての心なり 又引哥に

吹むすふ風ハ昔の秋なから在しにも似ぬ袖の露かな」(七・

ウ)

摂政大政大臣

21 御吉野ハ山もかすミて白雪のふりにし里に春はきにけり

音羽山春日山小塩山此三の山に春立とよむなり 雖然三吉野
の山肝要なり

ふりにしさとハ日本の事なり又古宮の儀もあり

22 天の戸をし明かたの雲間より神代の月の影そのこれる

此哥天の岩戸のむかしの。なり^事 又當代の事もあり 両説な

り 暁月と云題にて春日の社頭にての哥^(虫損)□暁の月依無比類神

代の昔思いつるなり」(八・オ)

23 雲ハみなはらひいてたる秋風を松にのこして月を見る哉

秋風に雲をミなはらひはて、月のかくるへき所もなきにいつ

くにか月ハかくる、とミれハた、松にかくる、心なり

24 我涙もとめて袖にやれとれ月さりとて人の影ハミえねと

此哥ハ古今の哥を本哥にしてよめり 恋すれハ我身ハ影と成

にけりさりとて人ハそハぬ物ゆへの哥の心なり 月を袖にや

とさハなくさめむ心なり 又恋する身なれハ袖に涙ををきて

月もやとれとの心 若人きてあらハ此なみたを見すへしとの

心なり」(八・ウ)

25 いつもきくものとや人の思ふらんこぬゆふ暮の松風のこゑ

此哥古今の哥を本哥としてよめり こぬ人をまつゆふ暮の秋

風ハいかに吹ハかかなしかるらむ 又秋風とハかなしき心な

り 待人のこぬ暮ハ松風もた、秋風の声なり

26 忘れしと契て出し面影ハミゆらんものをふる里の月

此哥旅人もしをそくも帰らハあらむ心をふくミたる哥也 又

4 なき人の形見の雲や時雨らん夕の雨に色ハみえねと

雨中無常と云題也 人のかたみ^(三)ハ雲煙と成て立なれんかの
雲を無人のかたみにみるに雨ふり日暮ハおしといふこゝろな

り

5 みるまゝに山風あらくしくるめり都もいまや夜寒なるらん

熊野へ御参詣の道にてハ此御哥にこす哥ハあるへからす 山
風あらくハ都にかはる心なり めりハ時雨、ハの心なり」

(四・ウ)

6 我恋ハ真木のした葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいてめや

おもふ人にも色をハ見せぬ事。まして他人にハいか、 まき
ハ太山の心恋ふかき心 此御製ハ逸物也 桜さくにはまさり
たり 古躰也 した葉にもる時雨ハつよき時雨なり しくれ
ハおもひの事なり

7 袖の露もあらぬ色にぞ消かへるうつれハかはる歎せしまに

わすらるゝ恋と云題也 上句を下句にて云へき哥なり 一躰
也」(五・オ)

8 大空に契る思ひのとしもへぬ月日もうけよ行末の雲

無常の事なり

9 なかめはや神路の山に雲きえて夕の空をいてん月影

おなしくハ我と神とひと敷して天下をたすけはやとなり 我
心の不直を御歎の哥也 雲ハ神慮をへたつる心ハせの御哥也
長高面白也 神代の末にくたるをゆふへと譬たり朝をハ神世

に譬なり

10 瑞籬やわか世のハしめ契をきしそのことの葉を神や請けん

此五文字大事也 みな句へおほふ様也 我世の始ハ御即位
也」(五・ウ)

式子内親王

11 山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえくかゝる雪の玉水

此哥ハ只能したてたるなり この哥句ことに縁ある言なり
山館也 山居ハ山館よりハちひさくゆふ居ハ山居よりハちひ
さし 三をかねたるを山家といふなり 此哥幽居ハ世を遁た
る居所にあらず 此哥ハたゝ住宅したる躰とミゆ 此哥ハ御
製の哥にもましたる様なり もみくとしたる躰をよませ給
ふ 此親王ハ残所なく残躰なくあそハしたるなり」(六・オ)
12 なかめつるけふハむかしに成ぬとも軒はの梅よ我をわすな
此五文字両説なり 当代ハ悦の心歎 是一花に着したる今日
也 是二軒はの梅軒の字肝要なり つるこゝにてハすき去詞
にあらず

13 詠わひぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月や住らん

此哥ハ月をうらやむ哥也 下句二両説あり 野にも山にも
心一

14 桐の葉ハふみ分かたく成にけりかならず人をまつとなけれと

人思時ハくつも音あれハかなしきとの心也 恋の詩の心なり

15 君まつとねやへもいらぬ真木の戸にいたくなふけそ山のはの月」

自讃歌

「自讃歌 蜷川新右衛門尉親當」 (極札貼布)

「(表紙)

「(扉)

自讃哥作者等注 (謠山居) (支子文庫)

後鳥羽院 後鳥羽院ハ後白川の法皇の御孫 高倉第四の御子

御製又隠岐院とも

式子内親王 管齋院 後鳥羽院伯母 後白川法皇の御子 真言傳

授あるも哥道教給謝也 西行上人哥道の弟子

摂政大政大臣 法性寺入道前太政大臣の御子

前大僧正慈圓 法性寺殿弟 吉水僧正慈円始の名也後ハ慈鎮勅号な

り」 (一・ウ)

釋阿 俊忠三男

俊成卿女 成頼朝臣の女 通具室院の女房

権中納言通光 此人の妹後鳥羽院后也 内大臣通親の三男 母ハ刑

部卿範兼卿女 久我殿先祖也

権中納言通具 内大臣通親の二男 通光兄 堀川殿先祖

宮内卿 十九逝 源師光女

有家朝臣 藤原大宰大式重家の三男 母ハ経家郷女 今ハ堀川

大納言通光に哥ハマさりたり」 (二・オ)

定家 俊成二男

家隆 左兵衛佐猫間中納言光隆男

雅經 飛鳥井殿先祖

具親 宮内卿弟 号小野少將 源師光子也

寂蓮法師 定家猶子弟俊成猶子とも

藤原秀能 散位秀宗男 左衛門のせうの後」 (二・ウ)

西行 俗名佐藤兵衛尉範清 北面内裏之北面院之北面両所

にあり」 (三・オ)

自讃哥

後鳥羽院御製

1 桜さく遠山鳥のしたりおのなか／＼し日もあかぬ色かな

後鳥羽院の御製 女房ともあり 帝王の御哥をハ是非をさた

せぬ事也 遠花ハあかぬ物なり 俊成卿の九十の賀の御哥と

も

2 露ハ袖に物おもふ比ハさそなをくかならず秋のならひならねと」

(三・ウ)

后のしゅうしゃうの御哥 後京極御兄弟憚の心なり 露ハ袖

といふときハ二なり袖の露と云ときハ一なり させる事なき

なり此躰人丸の哥におほく見えたり

3 思ひいつるおりたく柴のゆふ煙むせふもうれしわすれかたみに

后の愁傷の事をおもひいつるとき柴のけふりを見てよミ給へ

り 此后ハ通光の妹也 此哥の返事あり」 (四・オ)

おもひ出るおりたく柴と聞からにたくひしられぬ夕煙哉



(表紙)

自讃歌作者手注

後鳥羽院 後鳥羽院は後白川の法皇の御孫高倉院の皇子御製又法皇院の皇子

武子内親王 管赤院後鳥羽院伯母後白川の法皇の皇子真言傳授より并道親法親也四行上人并たの皇子

攝政大臣法性寺入道前太政大臣の御子

前大僧正意圖 法性寺の才吉水僧正意圖の意圖後意法初号より

後志三男

成親御子 成親朝臣の女通具室院の御子

權中納言通光 此人は妹後鳥羽院の内倉通親の三男母は刑部卿乾美御子久我女也

權中納言通具 内倉通親の二男通光兄後白川の法皇

宮内卿 十九歳源仲光

有家朝臣 藤原公家武重家の三男母は藤原女と云川上御子通光より

(一・ウ)

(二・オ)

後の愁傷の事をおもひいつるとき柴のけふりを見てよみ給へり^{侍^x}
 此^時後は通光の妹也 此歌の返事あり^(○○)

おもひ出るおりたく柴と友からにたくひしられぬ夕煙哉^{題^ハた、}
 哀傷と心得へし

〈○〉を除く校異は「鍋島本」を示す。流布本の「ある注」部は

ある注に後の御しうしやうをおもひいつるとき柴の煙を見てよみ給へり。後は通光の妹也。此御うたに思ひ出るおりたく柴と友からにたくひしられぬ夕けふりかな。返歌と也。

とあり傍点三字分及び歌の位置の相違のみで、そのま 支子文庫本注文である。なおこの注は温泉寺本に

(前略) 心は久我の内府の女中宮にておはしけるがくれさせ給^{内大臣通親}

ふをは歎ありて煙と成給ひし事を思召出る折節あやしの様のわざ^{通光の妹}に柴折たく煙の立のほるも彼忘形みと思給との御歌なるへし。御歌の返事思出る折たく柴と聞からにたくひしられぬ夕煙哉

と同趣の注があり、后を指摘しているのはこの二本との石川氏の御指摘である。

なお定家の「春のよの」の支子文庫本注には「ことにひかるけんし夢のうき橋の儀もあり」などの注もまじり興ひかれるものがある。以上ほんの一端ながら本書の注の他本とのか、わりについて諸先学の御研究に導かれて記してみた。成立年次及び何人による加注かの問題など後考にまつ次第である。

(注1) 同論文五ページ

(注2) 石川常彦氏「自讃歌宗祇注の周辺」(「山辺道」昭和五十四年六月号)二五ページ

翻刻

凡 例

- 1 原文を忠実に記すことに心がけたが、読解の便をはかつて、文の切れ目には一ますの空白を置いた。
- 2 文字は通行体に改めたものがある。
- 3 仮名遣い、補入、傍注、誤字、宛字、重複等は原文のま、記した。
- 4 脱字や意味の通りにくいところは(ママ)(○○カ)と傍注を付けた。
- 5 虫損箇所は□で示し、部分的に残った画で文字の推定できるものは□等の形で示した。
- 6 必要に応じて鍋島文庫本との校異をへの中^へに細字で示して判読の便をはかったところがある。
- 7 注文の改行は、紙幅の都合上原型のままでではない。
- 8 丁替りは「(一・オ)」、「(二・ウ)のように示した。
- 9 歌に通し番号を付した。

れたが、一・二例示しておきたいと思う。

①「桜さく」注の例

後鳥院の御製[×] 女房ともあり帝王の御寿をは是非をさたせぬ事[×]
也遠花共ありとをき花ハあかぬ物なり俊成卿の九十の御寿とも^{詠也[×] 詠也[×]}
校異で示したのが鍋島本注である。同文ながらいくらかのちがいを
見せている。

②「朝日かけ」注の例。校異で示したのが鍋島本注。

② すこしのこるをいふ是はむかしのもちひやう山の字肝要の眼
也此歌を吟する時は違例も平愈するのよし頓阿申さる[×]

① 此人定家の弟子也久我の類源家也彼人も定家の心には庶幾せ
す此歌 桜花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる蓬生の

宿 定家

鍋島本は①②の順。順序は異なるが注文は全く同一といって過言で
ない。②の後に「あさ日かけにほへるに済ぬ色ハつれなしと也」と
叡山本の「又云」以下の後半部注が併記されている。

因みに流布本では

又ある注に此うたをきんする時はいれぬも平癒するよし頓阿申
されしと也

と、前半の一部が引かれており、またこれは「東野州聞書」に

頓阿申しけるは、いかなる病中にも此の歌を吟ずれば心のはれ

／＼となると申しけるとて人のかたり待し。

とあるのと深い関係を示している。参考までにあげた。

かくの如き鍋島本と本書注との照応は表にも示したとおり殆んど
全面にわたつてのものであるが、人物に関する注が本書では後に記
されるに對して、鍋島本では先ずはじめに記され、歌の注に入ると
いう順序の交替、又細部の表現のちがひ、文字表記の相違などがあ
り、その書写関係は直接的な親子兄弟の如きものとは云いがたい。

鍋島本の照応注は本書と同一系統の一本により加えられた注であろ
う。流布本との関係は石川氏が、「山辺道」前掲論文の中で「三、刊
本「ある注」——支子A、三手B、温泉寺、久保田A本——」の項にお
いて、「ある注」「ある本」「注」として記された六三首に對して
照応できる注——ほぼ同文、全く同文特徴的解釈など共通として含
められる解釈ではあるが四九首にかゝる旨を示された。これは私
の試みでも、紛らわしく数値にゆれが生じることが必然であるが、氏
の見解に同調するものである。なお氏も云われる如く宗祇は自説に
包含出来るものは包含して記した様子が歌題等「或る説に」と断り
は無くとも同じ表現を見る例が無くもない。

「或る注に」「本に」「注」として引かれたものについては前の
表に記した。人名注、和歌、引歌等を多くとつてゐる。例えば、
思ひいつるおりたく柴のゆふ煙むせふもうれしわすれかたみに

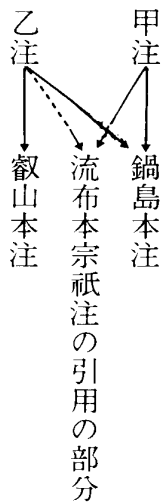
定家	101 春のよの 102 こまとめて 103 年もへぬ 4 松かねを 105 帰るさの 106 あちきなく 107 玉ゆらの 108 消わびぬ 109 いくにか 110 袖にふけ	96 97 98 99 100 101 102 103 104 105	
家隆	111 桜花 112 いかにせむ 113 したもみぢ 114 思いつる 115 昨日たに 116 おもひ出よ 117 明ハ又 118 その山と 119 なかめつ、 120 和歌のうらや	106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116	110 111 112 113 114
雅経	121 白雲の 122 尋きて 123 たへてやハ 124 はらひかね 125 うつり行	116 117 119 121 122	

具親	126 秋の色を 127 いたつらに 128 なれくゝて 129 草枕 130 君が代に 131 なにはかた 132 ときしもあれ 133 したへの 134 月の秋ハ 135 いまは又 136 はれくもる 137 又もかく 138 なかめよと 139 遠さかる 140 木枯や	124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140	136 140 149 ※ 149
寂蓮	141 いまはとて 142 かつらきや 143 物思ふ 144 村雨の 145 老のなみ 146 思ひあれハ 147 うらみわび 148 里ハあれぬ 149 さひしさは 150 月のゆく	136 137 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150	149 ※ 149

秀能	151 ゆふ月夜 152 山里の 153 月すめハ 154 草枕 155 した紅葉 156 もしほやく 157 袖のうへに 158 いまこむと 159 露をたに 160 あしひきの	146 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160	156 ※ 160
----	---	--	-----------------

西行	161 吉の山さ 162 よしの山や 163 なかむとて 164 哀いかに 165 月見ハと 166 きりくす 167 津の国の 168 年たけて 169 風になびく 170 山里に	156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170	162 164 165 167
----	--	---	--------------------------

赤瀬氏が前掲論文において鍋島本注と流布本「或注」の関係について詳しい報告の後、追記に本書注と鍋島本注の関係についてふれられたように、鍋島本注の後半部の注に本書の注は、鍋島本一六五首中本書の歌と異なる歌など数首をのぞいて、そのほとんどの注に照応していると言える。鍋島本注はその報告の通り本書注と叡山本注等との合体であり、本書の注は叡山本系の注（赤瀬氏の云われる乙注）を含まないもので、同氏が次の図の如く説明された



甲注そのものの伝本といえ鍋島・流布本の二本の注に先行する独立して存在した注と見なされることは赤瀬石川両氏のすでに言及されたとおりである。赤瀬氏は「むかし思ふ」の注を引いて追記に例示さ

支子文庫本	鍋島オ	流布本
後鳥羽天皇 1 桜さく 2 露は袖に 3 思ひいつる 4 なき人の 5 みるまゝに 6 我恋は 7 袖の露も 8 大空に 9 なかめばや 10 瑞垣や 式子内親王 11 山ふかみ 12 なかめつる 13 詠わびぬ 14 桐のはは 15 君まつと 16 夢にても 17 忘れては 18 玉のをよ 19 いきてもよ 20 それながら 撰政太政大臣(真經) 21 御吉のは 22 天の戸を 23 雲はみな 24 我涙	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ × × × × ③ ④ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	③ ④※ ⑦ ⑨ ⑩

25 いつもきく 26 忘れしと 27 いはさりき 28 めくりあはむ 29 人すまぬ 30 春日山 慈円 31 いつまでか 32 木の葉ちる 33 霜さゆる 34 野への露ハ 35 岡への 36 思こと 37 世の中の 38 をしなへて 39 山里に 40 我たのむ 通光 41 三島江や 42 むさしのは 43 明ぬとて 44 明ほのや 45 さらに又 46 峯こゆる 47 なかめわびぬ 48 かきりあれハ 49 猶てらせ 50 浅茅生や	②① ②② ②③ ②④ ②⑤ ②⑥ ②⑦ ②⑧ ②⑨ ②⑩ ②⑪ ②⑫ ②⑬ ②⑭ ②⑮ ②⑯ ②⑰ ②⑱ ②⑲ ②⑳ ③① ③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ③⑩ ③⑪ ③⑫ ③⑬ ③⑭ ③⑮ ③⑯ ③⑰ ③⑱ ③⑲ ③⑳ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤	②④ ③① ③⑧ ③⑤ ④① ④② ⑤①
---	--	--

通具 51 梅の花 52 あわれ又 53 かげやどす 54 野へにをく 55 しもむすふ 56 冬の夜の 57 霜こぼる 58 木葉ちる 59 せきかへし 60 今こむと 俊成 61 むかし思ふ 62 忘れしよ 63 しめをきて 64 いかにして 65 嵐ふく 66 仙人の 67 難波人 68 まれにくる 69 ちらすなよ 70 たてかへり 俊成女 71 梅の花 72 面影の 73 あたにちる 74 いにしへの 75 おしむとも	④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ④⑩ ④⑪ ④⑫ ④⑬ ④⑭ ④⑮ ④⑯ ④⑰ ④⑱ ④⑲ ④⑳ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑤⑩ ⑤⑪ ⑤⑫ ⑤⑬ ⑤⑭ ⑤⑮ ⑤⑯ ⑤⑰ ⑤⑱ ⑤⑲ ⑤⑳ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑥⑩ ⑥⑪ ⑥⑫ ⑥⑬ ⑥⑭ ⑥⑮ ⑥⑯ ⑥⑰ ⑥⑱ ⑥⑲ ⑥⑳ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑦⑩ ⑦⑪ ⑦⑫ ⑦⑬ ⑦⑭ ⑦⑮ ⑦⑯ ⑦⑰ ⑦⑱ ⑦⑲ ⑦⑳ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱ ⑧⑲ ⑧⑳ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱ ⑨⑲ ⑨⑳ ⑩①	⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑤⑩ ⑤⑪ ⑤⑫ ⑤⑬ ⑤⑭ ⑤⑮ ⑤⑯ ⑤⑰ ⑤⑱ ⑤⑲ ⑤⑳ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑥⑩ ⑥⑪ ⑥⑫ ⑥⑬ ⑥⑭ ⑥⑮ ⑥⑯ ⑥⑰ ⑥⑱ ⑥⑲ ⑥⑳ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑦⑩ ⑦⑪ ⑦⑫ ⑦⑬ ⑦⑭ ⑦⑮ ⑦⑯ ⑦⑰ ⑦⑱ ⑦⑲ ⑦⑳ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱ ⑧⑲ ⑧⑳ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱ ⑨⑲ ⑨⑳ ⑩①
---	--	--

76 色かはる 77 ふりにけり 78 霜かれハ 79 したもえに 80 夢かとよ 宮内卿 81 かきくらし 82 花さそふ 83 かたえさす 84 心ある 85 月をなを 86 しもをまつ 87 立田川 88 きくやいかに 89 からにしき 90 まとろまで 有家 91 朝日かげ 92 こぬ秋の 93 おほよとの 93 花をのみ 95 行年を 96 物おもはて 97 旅衣 98 岩かねの 99 我なから 100 春雨の	⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑦⑩ ⑦⑪ ⑦⑫ ⑦⑬ ⑦⑭ ⑦⑮ ⑦⑯ ⑦⑰ ⑦⑱ ⑦⑲ ⑦⑳ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱ ⑧⑲ ⑧⑳ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱ ⑨⑲ ⑨⑳ ⑩①	⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑧⑩ ⑧⑪ ⑧⑫ ⑧⑬ ⑧⑭ ⑧⑮ ⑧⑯ ⑧⑰ ⑧⑱ ⑧⑲ ⑧⑳ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑨⑩ ⑨⑪ ⑨⑫ ⑨⑬ ⑨⑭ ⑨⑮ ⑨⑯ ⑨⑰ ⑨⑱ ⑨⑲ ⑨⑳ ⑩①
--	--	--

『自讃歌』について

(注)「かきりあれは⑤②」は支子文庫本
48番と同歌。注の照応あり。
十五

が、多くの歌書、古典類の書写を残していることでも知られている。続類從三九四所収正徹の「詠百首和歌」の筆者でもある。因みに書は心敬・正徹・東常縁らと共に勅筆流(徹書記流とも)の名筆家の一人である(本朝古今名公古筆諸流・流儀集・古筆流儀別・古筆流義分・古筆分流)。文安五年歿。

本文の文字は確かに勅筆流の流れをくむ文字と見られ、知蘊筆の正徹奥書をもつ「伊勢物語」(千歳文庫本。新典社)等と比してみると似通った文字であり、また子孫の蜷川親政・親元・家俊らの文字にも通うものである。よしや親当の書写と確信できぬまでも、いづれそうした圈内の歌人の手になるものと思われる。外題の「菊亭内大臣」は菊亭を称した今出川兼季の子孫の誰かであることは間違いないが定かでない。この流れに内大臣を経た能書家は多いが、極官名をもって「内大臣」と称されるのは伊季(宝永六年薨49才)であり、文字そのものからは尊鎮流の今出川晴季(内大臣)天正七年正月廿七日〜八年二月廿一日、右大臣)天正十三年三月十日任。元和三年三月廿八日薨79才)、また、中院流の今出川経季(慶安五年右大臣、承応元年二月九日薨59才)等に通うものがある。

最後に「語文研究」では東常縁注と紹介されたが、今のところ成立年次及び誰の加注であるかについては明確ではない。石川氏は注の記し方から「冷泉家の系統に属する可能性がある」とその御考えの一端をもらされている。今後の研究にゆだねられる課題であらう。内部徴象からの後考を俟つ次第であるが、書写者と目されるものの

周辺のかわりからも興味ある石川氏の御考察である。

二

本書の歌数は一七〇首。後鳥羽院以下西行法師にいたる十七人の作者各々十首ずつを有し、その作者の配列は、①後鳥羽院②式子内親王③摂政太政大臣④前大僧正慈円⑤権大納言通光⑥権中納言通具⑦釈阿⑧俊成女⑨宮内卿⑩有家卿⑪定家朝臣⑫家隆朝臣⑬雅経⑭源具親朝臣⑮寂蓮法師⑯藤原秀能⑰西行法師の順。古活字版を代表とするいわゆる流布本版本の「家隆・具親・雅経・寂蓮」とする配列とは、具親・雅経の位置が逆になっている他は同じであり、鍋島文庫本及び叡山文庫本の人物配列とも同じである。

次に歌の出入り及び注の照応関係について、本書を中心に鍋島本及び流布本との関係をみれば次の表のごとくなる。○印は注の照応することを示す。注の照応のし方には色々の形があり、全文・部分・要約的、同趣等が考えられるが、一応何らかの形で照応していることを示した。

それぞれの番号は、それぞれの本の歌の配列を示す通し番号である。×印は、上欄に掲げた支子文庫の歌と同じ歌の所収されていないことを示すが、異った歌の所収されている場合には、その初句をゴシック体で示した。※印は、流布本注に吸収された形で記されたもので、「ある注に」「又ある注に」などの項に引かれた注ではないことを示す。

支子文庫本

『自讃歌』について

——翻刻と解説——

福井迪子

ここに紹介しようとする支子文庫本『自讃歌』は、故田村専一郎先生旧蔵「支子文庫」報告（「語文研究」四十三号）において報告された中の一書であり、このほどは「佐賀鍋島文庫蔵『自讃歌註』をめぐる」と題する御論考の追記（「国語国文」（四十七巻十号）

に赤瀬信吾氏がその性格についてふれられ、また「自讃歌宗祇注の周辺」（「山辺道」五十四年六月号）において石川常彦氏によってもとりあげられ「宗祇注以前に独立して存在し、宗祇註に影響を与えたものと認め^{注1}」られる註をもつことが再確認され、その占める位置の重要性に注目を集めるにいたっている書物である。

はやく翻該紹介の計画をもちながら、諸般の事情からその機をえず、ようやくその運びとなったことをつけ加えさせていたゞく。

一

九州大学図書館蔵。支子文庫。整理番号（九一一一—二）縦二四・四×横一六・九糧。列帖装、料紙楮紙。表紙は金茶地金欄緞子、鳳凰牡丹花文様、原装のまま。墨付四一丁。歌は原則として一首一行

『自讃歌』について

書、注は歌より二字下げで記され、一面九行書。歌数一七〇首。巻頭に後鳥羽院以下歌の作者一七名の出自を簡単に記した「自讃歌作者等注」を有す。序文並びに奥書なし。室町末期の書字とみられる。包み紙に「外題 菊亭内大臣御筆 / 自讃歌 蜷川新右衛門尉親當筆」と記され、扉に貼られた畠山牛庵の極札にも「自讃歌 蜷川新右衛門尉親當」とある。印記は、巻頭「自讃歌作者等注」と記された下に「謠山居」「支子文庫」、巻末本文下（四十一・ウ）に「謠山麓舎」、四十二・オ中央に「松下」印を押す。いづれも故田村専一郎先生の旧蔵印である。

さて牛庵極札の蜷川親當は、号を知蘊と称し、足利義政に仕え政所代をつとめた幕府の吏僚であったが、和歌は冷泉派の正徹の門弟格でその交友圏に属し、^{注2}「草根集」巻六には「永享六年十月十七日宮道親当すくめしに」などとその名が記され、永享期武家歌壇での活躍の一端を窮うことができる。なお井上宗雄氏によればその当時「畠山義忠・山名熙貴・東素明・畠山持純・斯波茂有・畠山義有・山名持豊・親當らの家で歌会が行われていた」由。また没後三年の追善供養をその子の親元が催した日の正徹の詠が同じく「草根集」六に「宝徳二年五月十二日宮道親元故入道智蘊第三年の追善の為に法花廿八品す、めし中に」「懷旧 わかの浦の三とせの浪にこき別れひとつ心の友舟もなし」とあって、正徹の故人との間柄の程をしのばせる。知蘊はまた連歌を梵燈庵に学び連歌人としても名があつた